解説記事

海外フィールドワークをめぐる知の還元という課題

Return of Scientific Knowledge to the Researched Society:

Fieldwork in Other Countries

松本 博之・森本 泉

MATSUMOTO Hiroyuki and MORIMOTO Izumi

(2012年10月13日受付 2013年3月9日受理)

今日われわれのフィールドワークという営みには調査による地域貢献の課題がつきまといっている。フィールドが海外になると、地域貢献は容易に達成できるものではない。われわれ地理学者が地域的差異の究明を研究目的に掲げているように、海外でのフィールドワークの成果を還元しようとすれば、地域社会の特性に応じて社会文化的な差異を越えなければならないからである。そこには、科学者の形づくる知の性質、還元を計る空間的な内実とスケール、還元を意識する研究者の立ち位置など、克服しなければならない数多の問題点がある。本稿は、それらの問題点の基本的な側面に検討をくわえ、望ましい知の還元への方途を模索する試みである。

The scientific knowledge acquired through fieldwork should be returned to people in the research area. It may be difficult for researchers to return the results of fieldwork to other countries because of differences in sociocultural contexts. However, such issues between researchers and the researched should be overcome. They include issues on the objectivity of scientific knowledge (situated knowledge), multivocalities (and messiness) of the researched, the moral economy of researchers, etc. We attempt to identify valid methods for the appropriate return of knowledge to the researched.

キーワード: フィールドワーク, 科学的知, 還元, 社会文化的コンテキスト, 立ち位置

Key words: fieldwork, scientific knowledge, return, sociocultural context, positionality

I はじめに

「案ずるより産むが易い」という寸言にもあるように、具体的に知の還元の可能性を探るほうが得策かもしれない。われわれが「海外フィールドワークをめぐる地理的知の還元」をテーマに共同研究を始めたのは、まさにそれが目的であった。しかし、これまで調査地へ手土産や収集した資料のコピー類、フィールドで撮った写真のアルバムや報告書を持参したことはあるものの、いつも一方的にこちら（自国）から向こう（調査地）を訪れていることや長短のフィールドでの滞在のあと、いずれはその地を離れ別の世界に身をうつすこと、それになによりも何か別の目的のための手段というニュアンスのともなう「調査地」という言葉を使うことなどに一種の違和感をもちながら、どちらかといえばフィールドワークにもとづく大学内や研究機関内での知の形成と、フィールドにおいてではなく自国内の教育現場やアカデミーの場での知の還元を

もっぱらとしてきた人間には、一歩具体的な還元策に踏み出すまでに、みずからの足場をふり回り、その違和感の抱えてきたる所を検討しておくことも、地理的知の還元を考えるうえで意味のあることのように思われる。

知の還元。原理原則からいえば、知とは何か、還元とは何かである。地理的知の還元という、いずれの研究者も心の片隅にいだいている思いを引きずり出してみると、今更ながらその問題点の広がりや深さにとまどいを覚えざるを得ない。教育者や研究者として、教育やアカデミーの場でフィールドワークによる知の還元を図ることはいうまでもないが、それを超えて、そもそも研究という営みの根幹にあるはずの一般社会や調査地への還元を意識すると、フィールドでのなんとなくしろめたい思いの陰にひそんでいるさまざまな問題点が顔をのぞかせる。

たとえば、フィールドで展開する生きられた実践的な生活世界(lifeworld)と近代科学としての方法的操作

によって形づくられる静的な知とのすき間、あるいはもはや中立的や客観的のといって済まされないことが自明なものとなった科学的知のゆらぎ(Atkinson, et al. 2005: ix), ましてや社会の空間的・時間的な流動性ないし動態性がいちじるしい現在の状況下であって、固定的なモデルとしての知を形づくることの困難さなどである。

一方、還元に目をむけても、そこにも検討すべき課題は山積みである。元来還元は、近代啓蒙主義の指導理念の1つとして、近代科学の推進によって生み出される理性的知識が社会に還元され、社会福祉の増大へとみちびくスローガンであった。だから、元々科学研究の推進は知の還元と表裏一体のものであったといえる。ところが、そのことを改めて意識的に語らなければならないとなったのは、研究という営みと社会への還元とのあいだに齟齬が生まれてきたということである。ディシプリンによって違いもあるだろうが、近代化の過程で、一方では研究ないし知の形成という営みの中核が大学をはじめとした研究機関に特権的に限定され、他方ではその還元先の1つである教育も制度化され、その範囲内で科学的知が自己充足的ないし自己閉鎖的に再生産され消費される事態をまねき、硬直化してきたからである。

しかし、その問題を脇に措くとしても、国内はもとより、それが海外でのフィールドワークによる知の還元ということになれば、事はより一層複雑化する。とくにロカリティや地域的差異の探究を目標にしてきた地理的知にあっては、調査者の属する自集団やアカデミーとフィールドの人々とのあいだに横たわる環境や社会・文化の差異を意識せざるを得ず、知の形成やその還元にあたって、そうした社会文化的なコンテキストの差異という境界を越えなければならないばかりか、フィールドワークを行う側と行われる側(知を形成する側と形成される側)といった知の権力性からむ不均衡の問題も無視できなくなっているからである。

ところで、こうした諸問題に関する検討が試みられてこなかったわけではない。R. チェンバースの『第三世界の農村開発』(1995)を嚆矢とする開発研究(development study)の分野においては、科学的知の問題性や応用の適切性を考慮した研究の蓄積は数多くある

(たとえば、梅原1992; チェンバース2000, 2007; Schech and Haggis 2002; 小國2006; 小國・亀井・飯嶋2011など)。また、地理学においても、日本国内ではあるが、たとえば宮口(1998)のように、地域開発ないし地域づくりに関係づけた地理的知の還元、あるいはまた近年の環境問題への地理学的アプローチを提唱する研究のなかでも、地理的知をより実践的な課題解決のために活かそうとする試みもある(伊藤・浅野2003)。一方、海外の地理学にあっては、フィールドワークに関するテキストや雑誌の特集号のなかで、示唆に富む方法論的検討は行われているが(たとえば、Crang and Cook 1995; Geographical Review 2001; Scott, et al 2006)、フィールドへの還元をもふくめた海外フィールドワークの方法論的検討は管見のかぎりではあまり見られない。

また、フィールドワークといっても多岐にわたる地理学の分野であるから、多様なフィールドや研究テーマにもとづくフィールドワークの実践の諸問題については先に示したGeographical Review特集号所収の諸エッセイにゆずり、本稿では、限定的ではあるが、知の還元がより問題となる第三世界ないし第四世界を念頭におき、主に地理的知もふくまれる科学的知の形成にとまなう問題と知の還元に伴随する問題に焦点をあて、次節以降、もう少し深く検討してみよう。

ところで、フィールドワークによる地理的知といっても、テーマしだいで広域にわたるイクステンシヴなものもあるが、ここでは地理学的研究の1つの核をなす地域研究のなかの地域性の究明に照準をあてる比較的長期的な滞在型ないし継続型のインテンシヴなフィールドワークを念頭において、地理的知の形成と還元がはらむ問題点を考えてみることにする。近年、フィールドワークは地理学の専売特許ではなく、多様な分野でその声が聞かれる。しかも、大学のカリキュラムにおいても、学内での講義だけではなく、現場に触れる、あるいは現場への還元という合言葉のもとで、フィールドワーク論に関するテキストも各分野で盛んに編まれている¹⁾。その隆盛に水を差すつもりはないが、そこにふくまれる問題点を同時にふり返っておくことも意味があろう。この小文はそのささやかな試みである。

II 知を形づくること

まず、知に関わる問題である。ここでは、あえて「ため」の議論をしようと思わない。しかし、知の還元に関係づけると、なによりも、知は科学的知(scientific knowledge)と日常的な生活知(everyday knowledge)ないし民俗知(folkloristic knowledge)に分けて考えなければならないだろう。科学的知は、日常的でかつ普遍性をもった生活知ないし民俗知のなかから、近代の過程で生み出された、その目的のために規律訓練された特定集団によって形づくられる、ある種フェティッシュ化された知ともいえる。地理的知はいずれの知もふくむものとも考えることもできるが、地理的知の還元というからには、研究者による科学的な地理的知が想定されている。科学的知と実践的な生活知が同質で同一の次元にあるものならば、あえて還元を問題にする必要はない。科学的知がそのまま生活知ないし民俗知として流用されるからである。

つまり、科学的知は実践的な生活知とは異なり、別の意味で還元（縮減 reduction）されることになる。第1に、近代科学の整備過程で生み出されてきた各ディシプリンは、まさに実践的な総体としての生活知に比して、生活世界の部分的な側面にしか焦点をあてない。近代科学の整備は各ディシプリンの確立過程において地理・歴史・政治・経済・社会など人間生活の限られた側面に焦点をあて、研究対象を限定し、方法論の精査を重ねてきたのである。それは、近代の研究教育機関の制度化において、各ディシプリンの存在理由を、つまりその存立基盤の確立を要請されたからである。そうした一種の分業体制はそれなりに研究や知識形成の深化を生み出してきたが、一方ではいわば縦割りのディシプリンのなかに閉じこもり、自閉的に科学的知が再生産され、部分的な知の形成しか行って来なかったともいえるだろう。目下その克服のために、複雑系というフレームワークの下で各ディシプリンを横断する知の形成が試みられているが、そのことは容易に実現されていない。

第2に、科学的知の形成過程はもう1つの問題点もはらませることになった。すなわち、科学的な操作は生活世界の部分的な側面のなかから、さらに知性的な理解に堪える指標を限定し、簡素化ないし単純化（縮

減化）を計るからである。知識形成の役割は、知性的な理解のために、ある側面からみれば混沌状態にある複雑な現実世界から基本的な構造（秩序）をみちびきだし、客観的かつ合理的で、冷静さ（公平性）を保ち、確証のある、普遍的な体系的説明をあたえることを意図する。説明が単純であればあるほど、知的に理解されやすい。そのために、科学的知は情動をもふくむ生活知の複合性や曖昧さをともなう実践的生活世界から乖離しているのである。しかも、1980年代の文化論的転回以後もはや常識化したように、フィールドワークをベースに知の形成が行われる場合、インフォーマントの個別性や情報の得られた時と場の状況、それになによりも「事実」とは調査者と在地の人々との相互交渉過程をつうじて生み出される関係的なものであることを捨象して、フィールドワークをする側が一方的に見たいことがらや聞きたいことがらの選択権をもち、しかも知の形成結果として研究者が特権的に「真正」な情報を表現する権利ももつという不均衡さもそこにははさまれている(Clifford and Marcus 1986)。

そのことは、第3に次の問題点にもつながっているだろう。生活世界がアカデミー内のコミュニケーションのために知の表現形態として言語的な表象（記号）、とくに科学的知の理知的・推理的認識による概念に置き換えられる（再現化される represent）過程で、人間の身体性をともなった行為的な生活世界から遊離することである。その抽象化のゆえに、言葉による表象（概念）は知性的な構築物である記号論的意味作用の脈絡のなかにおかれ、その言葉の意味の確定（ないし推理）はその表象（言葉）のおかれるコンテクストに左右されることになる。

したがって、知の形成過程で作用した研究者側のコンテクストによる意味と、概念化された科学的知の還元の結果、在地の実践的世界においてその言葉を受けとめ、その社会文化的なコンテクストに応じて解釈される際の言葉の意味にずれを生み出す可能性がたねにつきまとう。アカデミー内の概念によるコミュニケーションにおいてさえ、異なる言語間の翻訳に社会文化的コンテクストによる屈折が生まれるのに、ましてや言語と社会文化的コンテクストの差異を越えて、海外でのフィールドワークによる科学的知を多様な在

地の人々の実践的な生活世界へ還元することは至難の業といえるだろう。たとえば、還元が言葉に依るものではなく具体的な物である機械器具やその操作技術、あるいは施設の建設であるとしても、それらは、その後還元先で利用されるにあたり、当該社会のコンテキストに左右されることになる。筆者のネパールの経験では、箱モノ援助として建設された学校施設がその権益や所有権をめぐる権力者の強化や社会関係の悪化をまねいたり、管理費用の不足のために放置されているケースもあった。

それ以上に、還元が言語的に記述されるか、あるいは無形の話し言葉として伝達される知の場合、知を形づくる側の社会文化的コンテキストと利用ないし消費する側の社会文化的コンテキストとの齟齬が一層大きくなる。つまり、知の意味する内容が還元地域の多様な利害関係者のあいだでそれぞれの立場に都合よく解釈される可能性があり、還元された知が同一の意味内容の情報として中立的に移動する保証はないのである。

ところで、前節でも触れたように、知の形成にあたり、もう1つの大きな問題を考えておかなければならない。今日の社会理論を組み込んだ批判地理学の展開にみられるように、科学的といえども、もはや中立性や客観性という神話は崩壊している (Crang 1998: 184–186; Cook et al. 2005)。知の形成にはどうしても偏り (bias) がつきまとうからである (Dubow 2009)。文化はある特定集団が無意識のままに当然視している信条や価値を確認する信念体系である。だから、研究者といえども、ある特定の時代と場所の社会文化的環境のなかで思考のベースを築き、しかもフィールドにおいてある特定のまなざしによって知形成の基礎となる資料収集や対面的な聞き取り調査を行い、それらから知形成への道筋をたどるのであるが、時と所に状況づけられた (制約された) 研究者の立ち位置 (positionality) のありようを免れることはできない (Pratt 2009)。知の形成はフィールドにおける「現実」の無色透明のフィルターをとおした単なる要約や在地で受け止めた情報をそのまま伝達しているのではなく、「フィールドワークの実践」や「知識を書く」という行為は研究者によるレトリックをともなった偏りのあるリアリティの構築過程なのである (Crang 1998: 185)。だからといっ

て、偏りがあるから科学的知の形成が無価値だといったのではなく、科学そのものの営みや科学的知の形成が1つの社会過程 (social process) であることを自覚しておくべきだということである。

とくに海外でのフィールドワークの場合、よそ者である研究者の作り上げる地理的知はその生きる世界のコンテキストの違いゆえに在地の住民の生活知からの偏りをふくむ可能性が高い。それに、研究者というある特定の種別的な社会集団も、個人的差異はあるものの、一見コスモポリタンとしてふるまいながら、アカデミーの一員として、ある時代、ある場所の特定の社会を構成している利害関係者 (stakeholder) であって、その地理的知の形成はこれまた偏りを帯びざるを得ない。その意味では、いずれフィールドを離れ自国に帰っていく側面も有する調査者は、本来科学研究の埒外におかれ、中立性から遠いとされる旅人の側面を有していることも自覚する必要があるだろう。

最後に、それにくわえて、フィールドの地域社会にしても、単相で均質であることはめずらしく、多様な信念体系 (文化) をもつ階級、階層、エスニシティ、ジェンダーなどの差異をふくみこんだ複合的な社会である。そうした場合、現実にはフィールドにおいて、どのようなまなざしをもって、どのような声を取り上げ、どのような立ち位置から知を形成し、しかもどのような立場の人々に還元を計れば良いのか、そこにも悩ましい問題が浮上するのである。

III 知の形成と空間

さて、引きつづき検討すべきは、フィールドワークの場における地理的知に関わるその基本的な観点の問題である。仮に、その観点を「環境科学としての地理学」、「空間科学としての地理学」とすると、在地の環境と空間の内実や成り立ちが問題となる。実のところ、人文地理学において自然環境の問題はかなり久しく等閑に付されてきた。自然環境に関わる問題は、一時人文主義地理学 (Humanistic Geography) による検討をとおして、場所性の議論とともに焦点をあてられたこともあったが、今日主要には災害研究や批判的な環境問題研究、それに付随する政治生態学などの隣接科学との境界領域に道をゆずっている。人文地理学者の

大半は海外のミクロな地域研究においては、いきなり社会・経済・政治・文化現象を取り上げてまったく環境を無視するか、それらの分析記述のための前奏として、調査位置を示す代替物としてか人間活動の舞台としての自然環境の特性に若干触れる程度である。

たしかに、人・もの・情報の流動性や複合性のいちじるしい現代世界にあっては、社会・経済・政治・文化のそれぞれの側面を取り上げるだけでも個人によるフィールドワークとしては手にあまるものであるが、自然環境ないし生態学的な視点はやはり地理的知の存在理由を主張できる有力な側面であろう。隣接分野との境界領域である環境問題研究や政治生態学研究においても、ややもすれば環境をめぐる政治的な社会性に力点がおかれ、自然環境そのものの探究は不徹底である。それゆえに、知の還元を意図するならば、学際的な研究として地理的知の果たすべき役割もあり、海外におけるとくに周縁地域のフィールドワークにあっては、自然環境を考慮した研究を心がけるべきであろう。

しかしながら、現在の人間生活の様態は在地の自然環境との機能的関連づけのみにおいて説明することは困難であるし、時として観光対象としての民族文化にしても外部世界との関係性のなかで再構築されており、もはや近代の歴史を無視したロカリティ（環境）との機能的連関だけから現象を説明するのはアナクロニズムであることも心得ておかなければならないであろう（クリフォード 2002: 27-54）。

それ以上に、空間の問題がフィールドワークによる知の形成につきまといっている。仮に、どこかミクロな空間領域をフィールドワークの対象にするにしても、知の還元がより良い生活、貧困の撲滅、生活水準の向上など地域や教育の開発を意図するならば、そこにはローカルな空間領域を超えたさまざまな階層や立場の異なる諸アクターたちがすでに関わっていることを考慮に入れなければならない。開発といった場合、後述するように知の還元が「木に竹を接ぐ」形になってはならず、住民たちの動機づけや将来像に近い姿が望ましい。その意味では、調査対象の範囲を空間的な閉曲線としてえがくことは許されない。たとえば、ミクロな地域社会には在地に居なくてもすでに域外との交通を通じて外部に地域社会出身のメンバーが数多く存在

する。地域社会とのあいだを往還し、ときには都市的な生活様式を身につけてしまった者として村のなかでの振る舞いを煙たがられる者もいるが、地域外に居ながら、地域の冠婚葬祭や宗教的儀礼にも参加し資金援助や親への送金を行っている者には、それが村では成功を収めた人物として、村びとの1つの将来像をえがくモデルになっている場合もある。とくに出稼ぎなど送金経済(remittance economy)の展開している世界では、その点に配慮することは不可欠である。

それに、開発という点では、ローカル社会にはすでに国際的なNGOが関わっているかもしれないし、地方政府も今日そうした開発政策の主要なアクターとして参画しているケースも多い。また国家レベルの開発政策や国際的な援助の動向も見逃せない。それゆえ、ミクロな地域研究を行うにしても、地理的知の1つの基盤をなすローカル空間や景観的まとまりを閉曲線（ミクロな文化領域）として想定するわけにいかないのである。

上記の点をさらに補足すれば、これらの開発主体（諸アクター）の目的が地域住民の内発的な方向づけと一致すれば良いのであるが、わが国の動向を見ても明らかなように、地域住民といっても今日一枚岩ではなく、それぞれの立場の違いが軋みをもたらしていることもある。旧来のトップダウン型の開発政策の反省として、ボトムアップとしての参加型開発が口にされるようになったが、目下のところ、地域住民以外のよそ者は大抵の場合費用対効果の監査がつきまといっているために短期的な成果を期待し、参加型の名目のもとに、やはりトップダウン的な進行になり、住民の主体性といいながら、その政策（知の還元）は地域住民の一部と感応するが、そこから排除されてしまう地域住民も生まれがちである（池口 2011: 25-26）。

だからといって、もちろん外部アクターたちの非をあげつらうことだけが良策とは思えない。地域性の究明に少なからぬ貢献を行ってきた地理的知は軸足をあくまでローカルな地域社会の主体性におきながら、外部アクターの政策に問題点があるなら、当該アクターの立場を考慮したうえで、その方向性に是正を迫ることも1つの役目であるだろう。われわれ地理的知の生産者はこうした地域社会の空間的な重層性や外部世界と関わる進歩的(progressive)な展開過程について

は、すでにその守備範囲としての蓄積もある (Massey 2005)。つまり、知の還元を計る際に、ローカルな地域住民の多様性と地域外の関与者を十分に考慮に入れ、それら諸アクターとの調整や、引いては一種のオーガナイザーとして諸アクター間の調整を計ることも重要な地理的知の還元の方策である。言い換えれば、フィールドという空間は、アプリアリに物理的な境界線をもった閉曲線としてえがきだされるものではなく、フィールドワークという実践において、研究者がインフォーマントをはじめとして関わるさまざまな人々との相互交渉過程において産出されるものであり、あくまで出来事としての社会的空間なのである (ド・セルト 1987: 199-238)。

しかしながら、これは後述することにも関わるが、開発ということがらは一方で慎重に対応しなければならない性格のものでもある。知の還元がいかに現代の社会的要請であるとしても、調査者の側から一方的に「開発ありき」と先行する形になってはならない (小國 2011: 235)。外部からの開発政策が往々にして頓挫するのは、外部者の良心的営みだとしても、それは外部からの知の還元が、そこに、社会問題なり経済格差なり、外部からのまなざしによって問題をアプリアリに構築してしまう可能性があるからである。外部からの問題化の尺度はややもすれば近代化的開発指向が優先する。ときによると、地域住民の表面的な指向性もそれと同調しているように受け取れることもある。しかし、それは研究者もふくめた外部からのアクターによる住民へのインタビューやまなざしの内容がアプリアリにその指向性を引き出していることもあるのである。

IV 知の形成と住民自身の将来像²⁾

それにしても還元を意図するならば、知の形成にあたり、もう1つ是非とも考えておかなければならないことがある。研究に取り組む姿勢の問題である。今日、こうした意識は研究者のあいだで顕著になりつつあり、研究テーマそのものが社会問題の解決をめざした社会的実践を意図して進められていることもある。しかし、海外でのフィールドワークの場合当初からあきらめているといえなくもないが、大半の研究は、地

域社会の過去、現状、あるいはこれまでの来し方の展開過程を対象にして、そこにある規則性やその変化の過程を明らかにしようとするものである。知の還元といった場合、そうした研究から得られた知をそのまま当該地にもち込めば、それで事は済むのであろうか。

そもそも在地の現状や展開過程の分析によって形づくられた知は、在地の人々の主体的な願望や欲求を多少なりとも映し出すものであるのだろうか。住民には別の思いがあったけれども、現状やその軌跡はその地の環境や空間関係からの抵抗、あるいは歴史的な制約によってえがきだされたものであるかもしれない。現状は在地の人々の願望の表現であったのか、それともあきらめないしやむを得ず従った結果であるのかは判然としないのである。あきらめや、やむを得ず従った結果こそ、在地の人々の願望と環境や歴史的な制約の干渉像として、知の還元がベースにすべき素材になると考えることもできるが、それでは、在地の人々が主体的に望ましい将来像をえがくための手だてになるかどうかは疑わしい。

これまでのフィールドワークの経験をふり返ってみると、在地の人々はどちらかといえば自分たちの現在のあり方を多少とも宿命論的に受けとめているケースが多く、フィールドワーク開始当初は在地の人々の希望といった仮定の話を引き出すのがむずかしいこともある。つまり、われわれ自身のことをふり返ってみても、願望や将来像をえがくためには、自己の日常生活に浸透している文化や社会を相対化したり客体化して考えなければならないのであるが、そのことがなかなかむずかしいのである。だからといって、在地の人々が願望をいだいていないわけでもなければ、将来像を思いえがけないわけではない。少し時間をかけて、こちらの意図が伝われば、そうした話題に積極的に取り組んでくれる場合もある。また、在地の人々は往々にしてその断片的なことすらだけを語るかもしれない。目先の欲望だけを語るかもしれない。そこでわれわれ調査者がそれらを秩序づけ、組織化することによって人々の望む将来の青写真をえがくということである。知の還元は在地の将来像を考える上での手だてであるわけだから、まずはその前提としてフィールドワークにおける上記の作業が必要であるだろう。たしかに、現代世界にあっては、どの社会においても流動性がい

ちじるしく、住民自身も確たる将来像をえがくことはむずかしいが、それでも、現状としての社会や文化の分析をめざしたフィールドワークを行うとともに、少なくとも彼（女）ら自身の将来像へと調査の射程を延ばすことが不可欠である。前者だけが現実で、後者が現実でないとは言い切れない。知の還元のためには両者を比較検討することが必要ではなかろうか。まずは在地の人々の願望と欲求があり、その後、知の還元や施策を考える。これが本筋であろう。

言い換えれば、そこでは方法論的に「分析から創造へ」といった視点の変換が要求されることになる。旧来の知の形成は、あくまで現状分析に立ちながら、そこに規則性や傾向性を見出し、起こっている現象に説明を与えるという方法であってきた。これだけでも、妥当性のある見解をみちびくことに多くの困難をかかえているのであるが、その研究手法としては、どちらかといえば、現象の機能主義的分析が支配的である。それにもとづき、知の還元を計ろうとするのであるから、一種社会工学的に操作を行おうとするものである。実証主義的な立場に立つならば、われわれ研究者にはそれしか手だてがないともいえるが、そこに見られる方法論は煎じつめれば、起こっている現状やその社会がたどった軌跡を肯定的に「後追い」して、後解釈を施しているにすぎない。

しかし、その次元にとどまれば、先ほども述べたように、それは在地の人々の望んだ結果であったのか、それともやむを得ず従ってきた軌跡であったのか分かりはしない。学問研究の知的成果を還元しようというのは、当該地域の社会がなんらかの問題性を抱えているから、それを良き方向にみちびこうとするゆえに、意図されるのであろう。そうであるならば、同じ社会工学的な視点であるとしても、現状肯定的な後追い研究から離脱して、そこに地域住民の将来像にもとづく仕掛けを組み込むという創造性への視点のシフトが必要ではなかろうか。たしかに、創造という言葉はいまいであり、ときとして単なる対処療法にすぎない側面をもつ。とくに現今のような社会の動態がいちじるしい状況下にあっては、一時点における仕掛けで事は済むものではない。試行錯誤を要求されるとしても、新たな一歩へ踏み出すには、たんに現状の機能的分析から形成された知だけでは不十分であり、創造への視

点の変換が必要であるだろう。

V 知の還元への研究者の意識

これまで主にフィールドワークによる知の形成に関わる問題点をみてきた。ところで、海外でのフィールドワークによる知の還元といった場合、調査者や研究者の、表面化されないがそこに働いている意識や無意識のまま前提にしていることがらがあるように思われる。そのことはフィールドワークという行為の問題性とも深く関わっている。

まず知の還元には、フィールドワークに対する贖罪意識が働いているかもしれないことである。フィールドワークが自国や欧米世界（先進国³⁾）を対象に行われるとしても、本来的に知の還元が計られるべきであるが、インフォーマントや関係機関への手土産や調査報告書の提供を超えた知の還元を取り立てて意識するのは、用語として不適切かもしれないが、フィールドが開発途上国や低開発地域のケースであるからではなかろうか。

そこにこそ、知の形成と還元という言葉にふくまれる意味のクリティカル・ポイントがある。海外でのフィールドワークという営みは経済的・政治的な側面からみれば、目下の国際状況のなかにあっては、その資料収集にしろ調査結果にしろ、調査者側の帰属する集団による地政学的な側面⁴⁾をもつことは否めない事実である。そしてその調査する側と調査される側の移動の方向性を考えれば、そこに現下の経済的・政治的な地域格差があることも無視できないであろう。さらに、知識形成の点でみるならば、もはや今日の時点に至っては、ニュートラルな地域像（地理的表象）という言説は幻想であり、表象する側と表象される側といった問題もふくまれ、それゆえ、知の形成それ自体が一種の権力関係を映し出すものと受けとめることもできる。したがって、還元という営みないし意味合いには、研究者側の一種の贖罪意識が働いているともいえる。つまり、研究者のフィールドワークは在地の知の収奪であり、権力構造を意識化させるものであり、それゆえ研究という営みの確固たる正当性を主張しえない、うしろめたさへの反省がふくまれているというわけである。

筆者の数少ない経験でも、調査の開始にあたって、オーストラリア、アメリカ、カナダなどの先進国内における先住民は第二次大戦後の民族意識の高揚のなかで、「マジョリティの研究者たちは知識の収奪を行い、彼（女）らはそれによって学位を得たり、その後研究職や官吏職に就いて報酬を得たり、自己の文化を活性化したりするのに、調査される側の自分たちには何のメリットもない」と批判的な意見があった。そのため、現実にはアメリカの研究者が調査を拒否されたケースも耳にしたし、調査地においても、在地の心ある者のなかには、「外来の調査者たち、とくに学位論文作成のために長期滞在した若い研究者たちが論文を書き上げたあと、再度来訪することは稀であるし、書いたものを送って来ることもない」と嘆いていた人もいたのである。

それと、もう1つは〈知のバイアス〉。地域性(locality)を重視する地理的知であるから、より在地の人々の知のあり方に近接しているとしても、前にも述べたように研究者集団の漫然とめざしている知識形成のありようが還元に相応しい態度で形成されたものかどうかという問題である。いわゆる科学研究は最初から知の還元を意図して取り組まれたものではない。今日、コンテキストを抜きにした真実や真理という言葉が人文科学や社会科学においてどれほどの有効性をもつものかは疑問視されているが、社会科学や人文科学は現象の一般的説明をその目的としている。しかも、そうした一般的説明を求めるために、常日頃研究に臨む姿勢としては文化や社会の相対主義的なスタンスを取っている。しかし、一旦科学的知の還元を意識すると、ややもすれば社会進化的な落差を前提にしてしまう傾向が強い。たしかに、他地域の情報が各種のメディアを通じて手元に届く現在の状況にあっては、フィールドの住民たちのあいだでも近代化への欲求には強いものがあるかもしれない。ただ、メディアを通じて流れてくる情報はきわめて選択的であるし、スペクタクル化し、その負の側面は情報化されていない。在地の人々の願望や志向性に耳を傾けるにしても、調査者側のフィルターに濾し取られてくるのは調査者側の分かり易さゆえに表面的な近代化への欲求であるだろう。しかし、近代化への欲求はそれを部分的に還元すれば、時としてそれまでヒューマン・セキュリティ

(生活の安全保障)としてあった在地の社会関係やコミュニティの基盤を崩してしまう恐れもある。それになによりも、目下の状況では、近代化とは開発途上国や低開発地域を一種の収奪機構である世界資本主義システムへ組み込むという側面のあることも考慮に入れておかなければならない。そのため、還元の結果が在地の人々の自律性をますます奪うことになるかもしれないのである。通常は社会や文化の相対主義を主張する調査者や研究者ではあるが、いざ還元となると、先進-後進といった単線的な尺度を安易に前提としてしまう危険性をはらんでいる。

VI 地理的知還元の方策

地理的知の還元は、可能なかぎり還元される人々の主体的な願望に沿う必要がある。理念としてはそのようにいえるのであるが、研究による知の還元は、即物的に地域住民たちの願望を適えればそれでよいということでもなからう。それでは、地理的知の還元の方策として、どのようなものが考えられるであろうか。1つには、研究者自身が所属する自集団において、地理的知がどのような役割を果たしているかを考えることである。これにもさまざまなものがあるだろうが、大きく分けると、間接的な方法と直接的な方法がある。

間接的なものとして、次のことがらが提案できるだろう。今日のグローバル化した社会にあって、在地と関わりをもつのは研究者だけではない。旅行者やビジネスマンは措くとしても、フィールドにおいてボランティアや国際的なNGO、それに日本のJICAなど実践的な活動を行っている人々と出くわすことも稀ではない。それに、当該国の地方政府や国家機関、さらには諸外国からの援助政策も見過ごすことができない。そうした諸アクターとの相互協力とならんで、それらアクター間の調整を手がけることが1つの方策であろう。各アクターにはそれぞれの意図と目的があり、それらの相互調整はかなりむずかしい問題であるが、地域性を基軸に、かなり広い視野をもって全体を考慮する地理学者としては1つの活動の場であろう。これまでも、地理学にはJICAの専門家として関与してきた実績がある。あるいは、より間接的になるが、JICAやその他の機関によって派遣される専門家や協力隊員

の研修への関与や彼（女）らの現地での経験を活かす意味で、これらの経験者と学会、研究会、教育現場で積極的に知的交流を図っていくべきであろう。

第2の間接的なものとして、次のことがらも考慮されてよい。地理的知の特性として比較という手法がある。われわれは国内でのフィールドワークにおいて、それまで訪れた他地域の情報を提供することがある。つまり、在地の人々自身がみずからの考えを他地域における事例と対比しながら検討できる手だてを提供することである。誰も自分たちの社会文化的な現状を自己反省するのは容易なことではない。そこで、たとえば在地に日本の在地社会に近似した生活のフィールドワークによる映像記録をアーカイブ化して利用できるような環境を整備する。在地の人々はそれを見て、自分たちの現状を重ね合わせ、将来を考える契機をあたえることになるかもしれない。日本の事例だけではなく、フィールドの近隣の諸国や世界の他の地域のものであってもよい。押しつけるわけではなく、彼（女）ら自身が比較検討しながらみずからの進むべき道を選択し、決定していくのである。そのための手がかりを提供するということである。

それでは、直接的な地理学的知の貢献分野としてどのようなものが考えられるだろうか。まず見えやすいものは教育という分野である。地理的知の形成者の多くは中等教育(secondary education)や高等教育(third education)に従事しているケースが多いからである。その場合、判然とは区分できないが、教育技術と知識教育に分けられるかもしれない。教育技術には、教育のための素材、今日であれば、パソコンとそのソフトウェアなど、他の分野でも応用の利く教育機材やその操作技術の提供である。地理的知という側面を強調すれば、具体的にはマッピングの理解をふくむGISの習得やその応用が考えられるだろう。あるいはカリキュラム・シラバスへの助言も1つの方策である。その場合、教育機器の不足に対してどのように対応するかという問題も生じてくる。それとならんで、そうした機器やその操作、それに機器を使って産出される結果に関して、その意味づけも学習しなければならない。そのためには、在地の教育関係者のリスクーリングも視野に入れる必要があるだろう。いずれも、財政支出のともなうものである。それゆえ、目的が異なるとはい

え、単一の科学研究費や各種財団の助成だけでは実現不可能である。もちろん、日本の学術振興会の助成には、多少ともそれぞれに対応したプログラムが準備されている場合もある。それらを有機的にシステム化することも還元の1つの課題といえるだろう。

しかし、教育には次のような側面のあることも考慮しておかなければならない。とくに基礎教育(elementary education)や中等教育への知識の還元を計る場合、地理や歴史という科目は基礎知識の獲得とならんで国民形成の側面を有することである。そのため、その教育内容は各国の国家的要請に応じて偏りがみられることである。たとえば、わが国の地理の教科書をふり返ってみると、近年では文化的側面や国際政治にかなりの紙幅が割り当てられているが、かつての教科書では加工貿易を国の基幹としてきた情勢下にあって、世界の諸地域の資源生産やその分布および先進国での工業活動の記述が大半を占めていたのである。一方開発途上国や低開発地域にあっては、第二次大戦後に独立を経た国々が多く、国民意識の醸成や国家統合が目下焦眉の問題としてあり、ナショナリズムの高揚や国民としてのアイデンティティ形成に焦点があてられており、教育上の知の還元にあたって、そのことも考慮しておかなければならない。

一方フィールドワークにともなった地理的知の還元ということであれば、1つは調査過程において収集される情報の1次的に集約したものの複製の提供である。たとえば、図化や文字化が行われていないフィールドであれば、作成した地図類、あるいは日本から持ち込める空中写真類、さらに筆者の経験では、在地における伝統文化の活性化という機運もあって、歌などの口承文芸を録音したテープ・CD・DVD、あるいは文字化した記録集を提供することである。フィールドワークには大抵カメラを持参するので、個人や家族写真、村の景観写真は、調査中とならんで、事後的にも提供が可能であろう。

しかし、資料提供は在地における関係者の多様性を考慮に入れなければならない。しかも、当然のことながらプライバシーへの配慮も必要である。フィールドワークの方法にもよるが、先ほど述べた研究教育関係であれば、在地において研究者や学生とのコミュニケーションをとる機会も往々にしてある。そうした場

合、知の還元はそうした共同研究者を通じて提供するケースが考えられる。ただ、在地の研究者や学生といっても、フィールドの人々とのあいだの社会階層の違いや調査者との関心領域の違いといった問題が残るが、いずれにせよ知識の共有ないし相互補完を図ることが望ましいだろう。アンケートを用いた悉皆調査のようなデータは直接的に還元することができる。インフォーマルなインタビューや行動観察など質的データはかなり還元がむずかしいが、在地の研究者や学生との双方向的なコミュニケーションによって、一方では得られた質的データのチェックに役立つであろうし、他方では知を還元しながら双方向的に研究課題の発見へと展開することもある。ただし、そこにはあくまでフィールドワークを行う研究者と在地の研究者ならびに学生とのあいだのフラットな関係が前提とされる。

続いて、フィールドの人々への直接的な還元である。地理的知の還元が意図するのはいうまでもなく、経済開発にとどまらず、地域社会の活性化ないし持続である。その呼び水をどのように仕掛けるかということも大切な課題である。フィールドの人たちがみずからの生活を客体化することはほとんどない。あるいは日々の行動をパノラマ的に可視化することもない。そうしたなかであって、地理的知の還元には、そうした人々にみずからを映す鏡を準備することがあげられよう。外部者の目と耳は、外部者であるからそうならざるを得ない面もあるが、知として、一方では簡素化し、他方では体系的に社会の基本的な組み立てと文化のありようを可視化させる。それを鏡として、地域住民は再帰的に反芻したり、自己のアイデンティティの拠り所を確認することもできるだろう。物質文化の収蔵展示、一年を単位にした地域を舞台とするパノラマの作成、あるいは技術革新のなかで消えていく日常の道具類の収蔵展示などは地味ではあるが、みずからの日常生活を客体的にふり返らせてくれるとともに、その収蔵品やディスプレイを素材として地域住民たちのあいだに語りとコミュニケーションを誘発し、集合的記憶の再構成を通じてコミュニティとしての社会的紐帯の強化につながるヒューマン・セキュリティの活性化をうながしてくれるだろう。

こうした還元方法がいくつかのサンプルとして考えられるのであるが、それらがどのフィールドにおいて

も有効な方策になるというわけではない。目下のところ一般論としてそれらを有効化する条件を議論することはむずかしく、それぞれのフィールドに即した還元方法が試みられるべきであるが、まずなによりもフィールドに寄り添い、日々の生活の行動をともにしながら理解を深め、在地の人々の主体的な動機づけを養い、同時に一方ではみずからがあくまで他者であることを自覚し、自己をもふくめた複数のリアリティがあることを知ったうえで方策を展開すべきであろう。

VII 結びにかえて

いずれにしろ、フィールドワークを一方的な知の収奪、科学的知形成の状況依存性、それに知の解釈をめぐるフィールドの人々の多声的状况において科学的知も相対化しなければならない現状、あるいは還元を一種の社会進化的な尺度にもとづいた営為という批判を避け、かつローカルな住民たちの将来像を考慮するとすれば、フィールドの住民たちとフラットな関係性に立ち、創発的なコミュニケーションの場がフィールドワークの営為には保証されなければならない。実際、フィールドでの自己をふり返れば、調査される人たちは調査者を始終観察し、気乗りしない話には耳を傾けようとしなないし、一方型にはまればみずから滔々と話してくれることもある。そうした意味では、フィールドワークを一種のフォーラムと位置づけることである。フィールドワークはそもそも調査者（よそ者）のフィールドへの介入である。フィールドワークは観光客のように他の情報源による既成の地域イメージを確認する経験ではなく、その望ましいあり方は調査者にとっても被調査者にとっても新たな知の創造である。フィールドワークは否が応でも在地の環境ならびに人々との協働関係に引き込まれ、フィールドワークによる知の形成はそうした諸関係の所産である。フォーラムとしてのフィールドワークという意味合いは、フィールドワークが調査者-被調査者という一方的な立場から行われるのではなく、あくまでそこに居合わせる者たちのあいだでの日常会話や自由討議の場だということである。

注

- 1) たとえば、小國ほか編(2011)、鏡味ほか編(2011)、武田・亀井編(2008)、佐藤(2002)など。
- 2) この節の執筆にあたっては、岩田氏の文献(岩田1969, 1982)を参考にした。
- 3) 川田順造(1997)が開発をめぐる問題を検討するなかで、「先進」や「開発途上」、「低開発」というような諸地域の呼称に、空間に見出される差異を一元論的進化論的な時間の前後関係に置き換える解釈が含まれていることを指摘しているように、これらの用語を無批判に使うことに躊躇いがある。しかしながら、これらに相当する他に流通している汎用性のある用語がないため、本稿では暫定的に「先進」、および「低開発」ないし「開発途上」社会という呼称を用いることにする。
- 4) フィールドワークは元来帝国支配計画と結びつくもので、探検、地図作成、動物・植物・鉱物・人間などの資源分類、それに民勢などの調査をふくむものであった(Katz 2009: 251)。

文 献

- 池口明子 2011. 干潟の住民参加型保全における「地域住民の知識」——沖縄島・羽地内海沿岸の集落を事例として。松本博之編『海洋環境保全の人類学——沿岸水域利用と国際社会』国立民族学博物館調査報告97: 23–47。
- 伊藤達也・浅野敏久編 2003. 『環境問題の現場から——地理学のアプローチ』古今書院。
- 岩田慶治 1969. 『東南アジアのこころ——住民の生活と意見』アジア経済研究所。
- 岩田慶治 1982. 『創造人類学入門』小学館。
- 梅原弘光 1992. 『フィリピンの農村』古今書院。
- 小國和子 2006. 『村落開発支援は誰のためか』明石書店。
- 小國和子 2011. 開発現象のフィールドワーク。鏡味治也・関根康正・橋本和也・森山 工編『フィールドワーカーズ・ハンドブック』223–243。世界思想社。
- 小國和子・亀井信孝・飯嶋秀治編 2011. 『支援のフィールドワーク——開発と福祉の現場から』世界思想社。
- 鏡味治也・関根康正・橋本和也・森山 工編 2011. 『フィールドワーカーズ・ハンドブック』世界思想社。
- 川田順造 1997. いま、なぜ「開発と文化」なのか。川田順造・岩井克人・鴨 武彦・恒川恵市・原 洋之助・山内昌之編『開発と文化1 いま、なぜ「開発と文化」なのか』1–56。岩波書店。
- クリフォード, J. 著, 毛利嘉孝ほか訳 2002. 『ルール——20世紀後期の旅と翻訳』月曜社。
- 佐藤郁哉 2002. 『フィールドワークの技法——問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社。
- 武田 丈・亀井信孝編 2008. 『アクション別フィールドワーク入門』世界思想社。
- チェンバース, R. 著, 穂積智夫・甲斐田万智子監訳 1995. 『第三世界の農村開発』明石書店。
- チェンバース, R. 著, 野田直人・白鳥清志監訳 2000. 『参加型開発と国際協力』明石書店。
- チェンバース, R. 著, 野田直人監訳 2007. 『開発の思想と行動』明石書店。
- ド・セルトー, M. 著, 山田登世子訳 1987. 『日常実践のポイエティーク』国文社。
- 宮口侗廸 1998. 『地域を活かす』大明堂。
- Atkinson, D., Jackson, P., Sibley, D., and Washbourne, N. 2005. *Cultural Geography: A Critical Dictionary of Key Concepts*. I.B. Tauris.
- Clifford, J., and Marcus, G. eds. 1986. *Writing Culture: the Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press. クリフォード, J.・マーカス, G. 編著, 春日直樹ほか訳 1996. 『文化を書く』紀伊国屋書店。
- Cook, I. et al. 2005. Positionality/Situated Knowledge. In *Cultural Geography: A Critical Dictionary of Key Concepts*, eds. D. Atkinson et al., 16–26. I.B. Tauris.
- Crang, M. 1998. *Cultural Geography*, Routledge.
- Crang, M., and Cook, I. 1995. *Doing Ethnographies*, Norwich, Geobooks.
- Dubow, J. 2009. Representation, In *The Dictionary of Human Geography*, 5th Edition, eds. D. Gregory, R. Johnston, G. Pratt, M. J. Watts and S. Whatmore, 645–646. Wiley-Blackwell.
- Geographical Review 2001. Doing Fieldwork (special issue), *Geographical Review* 91, No. 1–2.
- Katz, C. 2009. Fieldwork, In *The Dictionary of Human Geography*, 5th Edition, eds. D. Gregory, R. Johnston, G. Pratt, M. J. Watts and S. Whatmore, 251–252. Wiley-Blackwell.
- Massey, D. 2005. *For Space*. London: Sage.
- Pratt, G. 2009. Positionality, In *The Dictionary of Human Geography*, 5th Edition, eds. D. Gregory, R. Johnston, G. Pratt, M. J. Watts and S. Whatmore, 556–557. Wiley-Blackwell.
- Schech, S., and Haggis, J. eds. 2002. *Development: A Cultural Studies Reader*, Blackwell.
- Scott, S., Miller, F., and Lloyd, K. 2006. Doing Fieldwork in Development Geography: Culture and Research Spaces in Vietnam. *Geographical Research* 44(1): 28–40.

〈著者略歴〉

松本博之（まつもと ひろゆき）

1946年香川県生まれ。奈良女子大学名誉教授。専門はオセアニア文化地理学研究。編著『海洋環境保全の人類学——沿岸水域利用と国際社会』（2011年、国立民族学博物館）、『講座 世界の先住民族 09オセアニア』（共著 2005年 明石書店）、『〈都市的なるもの〉の現在』（共著、2004年、東京大学出版会）など。

森本 泉（もりもと いずみ）

1970年千葉県生まれ。明治学院大学准教授。博士（社会科学）。専門はネパール地域研究。主な著書『ネパールにおけるツーリズム空間の創出 カトマンドゥから描く地域像』（2012年、古今書院）。

「ネパールにおけるツーリズムの展開とツーリズム空間の形成」神田孝治編『観光の空間 視点とアプローチ』ナカニシヤ出版、89-99、2009年。The Change in Cultural Practices and Identities of a Nepali Musician Caste: The Gandharbas from Wandering Bards to Traveling Musicians, *Studies in Nepali History and Society* 13(2): 325-349, 2008. など。